

岡武
藤禎
雅夫
彦編

新本大系

第四卷

東京堂出版刊

編者略歴

武藤禎夫 大正十五年、東京に生まれる。東京大学国史学科卒業。現在、朝日新聞社日本古典全書編集長。編著に『江戸小咄辞典』『落語三百題』『江戸小咄の比較研究』（東京堂出版）『中国笑話選』『昨日は今日の物語』（平凡社東洋文庫）『日本小咄集成』（共編、筑摩書房）など。

岡雅彦 昭和十五年、北海道に生まれる。昭和四十年北海道大学大学院文学研究科修士課程終了。昭和四十三年フェリス学院大学講師。昭和四十八年国文学研究資料館助教。著書に『近世文学資料類従・九、案内者・世説問答』（勉誠社）など。



新本大系 第四巻

定価は箱に表示
してあります

昭和五一年六月五日 初版印刷
昭和五一年六月一日 初版発行

編者 武藤 禎夫
岡 雅彦

発行者 岩出 貞夫

印刷所 理想社印刷所

製本所 協和製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十五(〒100)
電話 東京 二一八三六 振替 東京 三二七

凡 例

本大系は主として江戸時代前期（明和年間まで）の所謂軽口本の代表的な作品を収録するものであるが、初期のものとしては、狂歌咄風の作品も収録した。

翻刻にあたっては、底本の忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものとするように努力した。その方針は概ね次の通りである。

- 1 本文の行移り・丁移りは底本に従わなかった。ただし、底本の各丁の終りに当る所に、版心の丁付により丁数を括弧内に漢数字で示した。例えば一丁の表と裏は（一オ）、（一ウ）で示し、挿絵がつづく場合は（一ウ）（二オ挿絵）、（二オ）（二ウ・三オ挿絵）などとした。底本に丁付を欠くときは洋数字で実丁数を記した。
- 2 句読点は底本にとらわれず、私見によって句読点・並列点を施した。
- 3 小文字の割り書等は意味のある場合にのみ再現し、咄の末尾の評語も本文と区別するために小文字にした場合もある。歌句は改行して理解の便を図った。
- 4 仮名。

イ 仮名の字体は現行の平仮名・片仮名に統一した。ただし、当時平仮名の意識で使用されていた「ミ」「ハ」「ニ」は読み易さを考え、そのまま残した。

ロ 特殊な合字・連字は現行の字体に改めた。（例、コ↓コト、メ↓シテ、ガ↓より、五↓さま）

凡 例

ハ 仮名遣は混乱しているが、底本通りとして、歴史的仮名遣には改めなかった。

ニ 本文の清濁は、底本では当然濁点のあるべき所に、ない場合が多いが、私に加えることはせず、底本通りとした。ただし、濁点の位置のずれは正した。(例、おとがし↓おどかし)

ホ 誤字・誤記と思われる仮名も改めず、行間に(ママ)と注記するか、或は正しいと思われるものを()で囲んで示すかした。

ヘ 衍字と考えられるものも削らず、(ママ)(衍)の注記をした。

ト 振り仮名も底本通りとし、削除したり補ったりはしなかった。「限り」^{かぎ}などの衍字もそのままとした。ただし、位置のずれは正した。(例、奈良↓奈良)

5 漢字。

イ 字体は原則として新字体を用い、新字体のないものは通行の旧字体を用いた。ただし、固有名詞などで底本のままにした場合がある。

ロ 異体字はできる限り、新字体或は通行の旧字体に改めた(例、泰↓松、嵯↓喜、妖↓秋)。しかし、該当する字のない場合(例、姚、泪、姫)は、そのまま残した。

ハ 宛字及び通行の久しい慣用文字は注記せずに残した(例、百姓↓百姓、陳所↓陣所、有時↓或時)。ただし、極端なものは(ママ)の注記或は正しい字を()内に示した。

ニ 特殊な草体・略体は通行の文字に改めた。(例、ひ↓候、ミ↓也、ヒ↓被、ウ↓給、ア↓部、井↓菩薩、厂↓鴈、广↓磨)

ホ 誤字・誤刻はそのままとし、注記を施した。

6 反復記号は底本にしたがい、「ム」、「ミ」、「メ」の四種を使用した。

7 挿画はすべて収録した。その位置は該当する咄の中か、近い場所に挿入した。後人のいたずらがきなどは消したが、他は修整しなかった。

8 校訂者の注は最少限にとどめ、行間に（ ）を以って示した。

9 虫損・汚損等による難読箇所は、他の同一版本で校訂した場合は特に注記はしないが、異版等でその文字を推定しうる場合には、（○○カ）と注記した。校訂出来なかったものは、空白のままとした。

10 謡の詞章に付したゴマ点や話の番号の囲みなどは削除した。文中に記された特殊な図柄は凸版で示した。

11 題名のない場合、検索の便を考え、各話の冒頭に、それぞれ通し番号を洋数字で付した。

12 諸本や後刷本との話の異同出入などで特記を要するものは、補遺の形で、該書の末尾または解題中に付加したことがある。

底本に用いた原本は、容易に閲覧できる利便を考慮して、公共の図書館・文庫や大学の研究室・図書館所蔵のものを主として使用したが、一部は架蔵本に依った。出来る限り初版完本を心がけたが、元版を求め得ず、その板木を用いた改題後刷本の方を紹介したものもある。また一部を欠いて不完全のため、他蔵書と合わせて揃えたものもある。その場合には注記を施した。

各巻末には、所収書の解題を付した。ここでは簡単な書誌と、諸本や後刷本との関係や異同などに触れた。第一冊～第四冊を岡が、第五冊～第八冊は武藤が、主として担当した。

底本の所在は一々記したが、公刊を許可された図書館・研究室は次の通りである。記して謝意を表する。

東北大学図書館・水戸彰考館・国立国会図書館・都立中央図書館・宮内庁書陵部・東洋文庫・東京大学図書館
・同霞亭文庫・同国語研究室・早稲田大学図書館・学習院大学図書館・大東急記念文庫・刈谷市立図書館・蓬
左文庫・京都大学文学部図書室・大阪府立図書館・天理図書館・広島市立中央図書館

目次

凡例 三

秋の夜の友（延宝五年刊）……………三

囃物語（延宝八年刊）……………五一

杉楊子（延宝八年刊）……………九一

新竹斎（貞享四年刊）……………一七五

籠耳（貞享四年刊）……………二二三

二休咄（貞享五年刊）……………二七三

諸国落首咄（元禄十一年刊）……………三二五

所収書目解題 三四五

嘶 本 大 系

第四卷

秋の夜の友

秋の夜の友卷一 目録

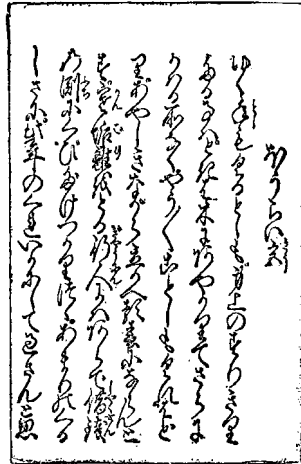
ほうらいきう

うしおき

松竹のろん

にんぎよ

ぜにがみ(二オ)



延宝五年刊

編者未詳

半紙本五卷

国会図書館蔵(一〇四)

京都大学蔵(恵方の春駒五)

秋の夜の友(二)

秋の夜の友序

ころハ秋も半バ、萩のうハ風やゝすさまじく、萩がした葉
もうつろふ折から、五条わたりのいにしへならねど、あば
ら屋の内にひとりたゝずみ、こしかたゆくすゑの事どもお
もひつゞくるこそわびしけれ。これに猶うちそへて、草む
らに鳴よへる虫の声／＼、妻とふ鹿の音までも、いとどあ
はれをもよ（二オ）ほすに、板びさしのすぎまより、もれい
る月影のさやかなるハ、不破の関屋もさこそとおもほゆ。
ことゝひきたる友もなく、夜ハながし、衣ハうすし。枕を
かたふくれども、いもねられず。待人ハなけれど、更行鐘
の声に心ぼそさハ、いやまさりなり。せめて、つれ／＼を
なぐさむたよりにハ、草葉色づく野のむらや、世にはその
名もたか崎なん（二ウ）どいふ、荑若草のしな／＼とり出し、
心ゆくばかりのミふすばらかし、目うちしばたゝき、しハ
ぶきまじりにおもひ出つゝ、そのかみみたりける夢物語を
筆にまかせてかきしるして、秋の夜の友となし侍る。ゆめ
を見て夢のあふたるゆめをバ、まさゆめとかやいへる。今
までみたりける夢の数／＼おほきなかに、まさゆめとおも

ふ夢ハなし。（三オ）かねひろふゆめハ夢にてさめにけりと
読し歌こそ、よきまさ夢の本哥なれ。瘧子ゆめを見て、た
れにむかつて語らんといへることも、よく／＼おもへハ見
性悟道のうへのみにかきらず。思ふ事はでぞたとにと在
五中將のよまれしも、すべて人間世界はみなこれならし。

（三ウ）

ほうらい宮

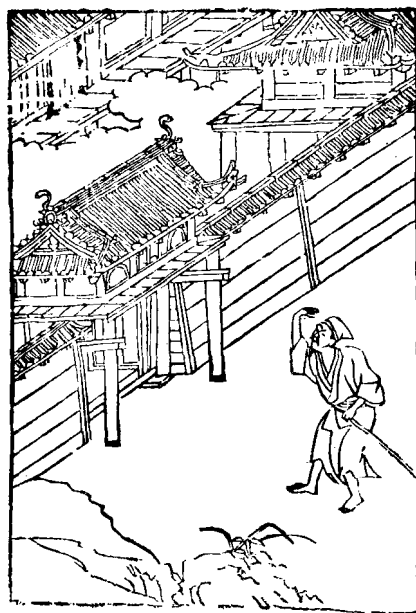
ゆく年もくるとしも、身上のすりきりたる事ハ、ときは木にあやかちて、さらにかへる所なく、やう／＼ことしもくれはどり、あやしきながら立かへる春にならんとす。寒垢離をとる行人にハあらで、借錢の淵にくびだけつかりつゝ、あまりのくるしさに、此年のくれ、いかにして過さんと思(四オ) ひわびて、かくぞよみける、

たつしやにも道ハあるけど越かぬる

年ハおあしのなきゆへぞかし

かくて節分の夜になりぬ。心ある人々は、年の名残ハこよひにありとて、大豆うちはやして、あそびあかし給ふかたもあるに、くれゆく年をおしむ心もなく、袖せバき、すがみこ、はだへもさらに氷とぢ(四ウ)て、百夜もおなじまるねに、木まくらたかくうちこけて、あはれこよひハ、ほうらい宮の鬼のくる夜なりとて、門口にも窓にも魭のかしら、校をさすとかや。家々物しづかになりぬるを、柴の戸を音づるゝ程に、あなおそろし、鬼のきたりて一口にくらハんとするかと、身の毛たちておそろしかりけれども、たそ

やたそとて(五オ)窓をさしのぞきたれば、右の手をしかととらへたり。さればこそと、きもたましゐも身にそハざりけるが、空をとぶやうにおぼえて下をミれば、海まん／＼としてほとりもなく、雲のなみ、けふりのなミ、はるかにしのぎて、ひとつの山にいたりぬ。波うちぎハよりして、そばだつ岸ハ水精輪なり。木だち世のつねならず、鳥の色音(五ウ)もやうかハりて、つたへきゝたる事もなく、めづらしきに、すこしあゆミたれば、並木の松道の両バうにありて、そのおくに楼門有。不老門と額をうちたり。門の内に宮殿あり。長生殿といふ額をかけたなり。猶そのうしろにハ、たかくそびえたる宮殿あり。大真宮と名づく。鳳のいらか五色の雲にうつり、虹のうつばりハまた、あまの川にかよふか(六オ)けはしかとあやしまる。庭にハ金銀のいさごをしき、玉の戸ざしうちひらけて、きれいなる事、ごくらくせかいも爰なれやとぞおぼえたる。御殿の内には、仙童仙女、花のたもとをつらね、そのうつくしき事かぎりなし。こゝハもとより、ほうらいきうといへる所ぞといふこゑ、かすかに聞えしかども、此所にすまバやとおもふ心はなくして、庭に(六ウ)しきたる金銀のいさごをみるよりほしく



なりて、これをとりにてかへり、日ごろの借錢をもみなすまし、妻子どもに小袖をもきせ、めでたき年をとらせ、ぶげんしやになりて、らくをせバやおもひ、かのいさごをつかみとりく、両のたもとへあまるほど入たりければ、肩ぼねのぬくる程おもく成て、あゆみかぬるところを、おくよりあらゝ（七才）かなる声にて、何ものぞ庭のいさごをつかみとるハ、そのらうぜきものがすなといふをきくよりおそろしくて、にぐるともなくころぶともなく、かたはらなる岩のかげにかくれて、小便をするとおぼえて夢さめに

けり。たもとに入たる金銀の砂ハ、さながら爰にあるやうにおぼえてミれどもなし。よるの物のうらハ、小便をたれてしとゝにぬれたりけれ（七才）は、おきあかりてかくそよみける、

借錢をこふ人あらばよぎのうらに

しとをたれつゝわぶとこたへよ（八才）（八才挿画）

うしおき

丑の年の大つごもりに、借錢をこひつめられて、息もはづむばかり也。とかくして夜も更にければ、どよみく人々かへりければ、あなうれし、今ハ心やすし、来年ハさり共仕合をとりなをし侍らんにとて、ふせりたりけるが、そことなく宿を立出たれば、門口に大きな牛をつなぎたり。うしのせなかに（九才）皮ぶくろをふたつ付たり。あたりをミれどもうしの主もなし。やがて内へ引入たれば、此うしまうく鳴けるを、人や聞らんとおもひ、口をふさぎはなをふさぐとする程に夢さめたり。うしのほゆるこゑかと聞しハ、妻がいびきの音也。とらへて口をふさぐうしかとおぼえしハ、ふるきぬのこのゑりにてぞ有ける。さもあれ、

めでたき夢かな、今年ことしより仕合なをる（九ウ）へきまさゆめなりとうれしくて、大ごゑをあけて、うしおきにかつはとおきといふておきあがりければ、そバにねたる妻つまや子とも、此声に目をさまし、きもをつぶし、やれかなしや、これの御亭ごていの氣ちがひになられたぞとて、泣なわめく程に、となりあたりの人々出合て、これハさて、にが／＼しき事也まづきをしづめよといふ。いや／＼（十ウ）氣ハちがハぬといふ。ねぢふせおしつけて、日のくるゝまでいためられて、大きに草臥くたひれて、かくぞよみける、



秋の夜の友（二）

ながらへバまた此ゆめやしのバれん

うしを見し夜ぞ今ハわびしき（十ウ）（十一十五才挿四）

松と竹

ぬのこのうへに古ばかまのしはたれて、まちのひくきをしめく／＼りつゝ、御屋方殿ごやかたへ元三の御礼まいり。雑煮ざんじしたゝかに喰く、こん／＼のさかづきに、ことのほか給醉たふあつゝ、町中まちなかを八文字やちもんじにふミはたかり、千鳥足ちどりあしになりて、宿にかへりけるが、しかるべき人の門に立られたる飾の松と竹と物いひけるを、ふしぎなり（二十五ウ）とおぼえて立聞たれば、松のかたよりいふやう、我いにしへより、このかた、葉色かハらぬときハ木の名をえて、しかも太夫くはんの官にいたり、十八公じちこうの榮花えいぐ十かへりのことぶきをひらき、かけどもつきぬおち葉ハ又、つきせぬ御代のしるしをしめす、しかるを世に名もなき物として、木にあらず草にもあらぬ竹風情たけふうせいの、おなじ座ざに立ならぶ事いはれなし（十六才）といふ。竹ハこれを聞て、大きにはらだち、ふしくれだちたるこゑにていふやう、こともおろかや、糸図いとづにも故事こじにも、すこしもおとるべきか、まづときはなる祝言ことばハ、我もおなじく名をえ

たり、汝^{なんぢ}ハ太夫の官^{くわん}になりて、梢^{こずせ}の風に身をたかくふけども、我^{われ}ハ又、此君^{きみ}といへれて、賢人^{けんじん}の風^{ふう}をしたふ事、世もつてかくれなし、そのミならず、我先^{せん}（十六ウ）祖^そ、もろこし鰯谷^{いわ}の竹^{たけ}にハ、鳳凰^{ほうおう}のすみて、ふくかぜに龍吟^{りゆうぎん}のひゞきあるをもつて、笛^{ふえ}ハこれよりはじまり、五調^{ごてう}十二律^{じふにりつ}も、これよりたゞしくなり、管弦音楽^{くわんげんおんがく}の頭^{とう}どりとして、音^ねとりの調子^{てうし}ハ、ふえを根本^{こんぽん}とす、又軍隊^{ぐんせん}に出^でむかふ、馬上^{ばしょう}のむちハ是竹^{しちく}なり、其観^{くわん}するところ不動明王^{ふどうめいおう}の智劍^{ちけん}、摩利支天^{ましかてん}の宝刀^{ほうとう}を表^{へう}せり、陰^{かげ}のむち陽^{ひのき}のむち、馬^{うま}（十七ウ）に飛^ひ行^{ぎやう}の通力^{つうりき}をあたふるハ、これ竹の徳^{とく}也、いかでか、あなどりいやしむべき、といふ。松^{まつ}これを聞^きて、湘江^{しやうきやう}の竹^{たけ}ハまだらにして、うれへの色^{いろ}を染^{そめ}出し、孤竹^{こちく}の竹^{たけ}ハみなし子^こにして、たよりなきすがたをあらへせり、さればこそ、うれへのときにつくつえハ、紫竹^{むらさきしちく}のつえとさだめられたり、かゝるいまハしき竹^{たけ}どの、無用^{むよう}のはらをたてんより、ふぐりをくらへとぞ云^{いひ}（十七ウ）ける。竹^{たけ}いよ／＼はらをたて、そも松^{まつ}にこそ、さま／＼よからぬ事^{こと}のある也、恋^{こひ}ちに取^とてはつれなき人^{ひと}にたとへられ、時雨^{しこりめ}のそめかねてとうらみられ、しがからさきにひとり立て、友^{とも}もなきさの一つ松^{まつ}と、さび

しきことに名^なをとりたり、しるしの塚^{つか}の松^{まつ}一本、人の歎^{なげ}きのたねとなる、ましてミの／＼国青野^{あきのの}が原^{はら}にてハ、熊坂^{くまざか}の長範^{ちやうはん}が方人^{かたうど}し（十八ウ）て、ぬす人の同類^{どうるい}たり、今もものミの松^{まつ}といはれて、あたりちかく立^たよる人、其まゝあやかちて、ぬす人^{ぬすひと}になるとかや、世のため人のため、あしきハ松^{まつ}の木にこそあれ、かやうのくせものとして、我^{われ}をおとしめいハんより、をのれがふぐりををのれくらへといふ。松^{まつ}聞^きて、はがミをしつゝ、えだ／＼をはりひぢになし、そも／＼松^{まつ}の徳^{とく}といふハ、大木^{だいぼく}（十八ウ）になりてハ虹梁^{こうりやう}といハれ、木の精^{せい}を土^{つち}にかくせバ茯苓^{ふくくりやう}となり、としを經^へて琥珀^{こはく}となり、千世^{せんせい}をかさぬる峯^{みね}の松^{まつ}、こずゑに通琴^{かよん}の音^{おと}のしらべや遠^{とほ}く聞^{きこ}ゆらん、霜^{しも}の後^{のち}までしのぐゆへ、忠節^{ちゆうせつ}の臣^{しん}にたとへたり、といふ。竹^{たけ}のいハく、蕭丘^{せうきう}の竹^{たけ}ハ雲^{うん}をしのぎ、そのすぐなるを君子^{くんし}にたとへ、節^{ふし}ミみだれざるを、君子^{くんし}の心にぞらへたり、天^{てん}（十九ウ）竹^{たけ}黄^{わう}ハ名藥^{めいやく}なり、竹茹^{ちくじょ}、竹瀝^{ちくれき}ハ人をたすく、茯苓^{ふくくりやう}こはくにおとるべきか、弓^{ゆみ}となり矢^やとなり、世の乱^{らん}をしづむる道^{みち}、すぐなるをしへをあらハせバ、晋^{しん}の七賢^{しちけん}これをしたひて、名^なを今の世に残^{のこ}したり、まことにたうときそれがしを、かくいふこそ口おしけれとて、すでに喧^{けん}

咄にをよぶところを、今まで立きくに、両方ともにふかき
 いハれ有（十九ウ）とおぼゆ、まづ／＼しづまり給へ、それ
 がし、あつかひ申さん、もとよりよきことハり、ふかきい
 ハれをバしらず、松と竹とハむかしより、対のものにて、
 めでたき所にはづるゝ事なし、松のつくには柱になり、家
 をつくらせ、板になり箱となりて用をとゝのへ、こえ松は
 油なき時ハ明となりて闇をてらし、松脂ハかうやくにねら
 れて腫物をい（二十オ）やし給ふ、又竹のかたにハ豆腐でん
 がくの串になり、火ふき竹、壁下地、耳かきになりつゝ、



人をたすくる道おほし、そのうへ両方うながら、命ながく
 めでたき御かた／＼、今更いさかひ給ふべからずとて、と
 りさゆると思ひしが、はたと目をさまし、酒の酔もさめぬ
 ゆゝしきあつかひをもしけるものかなと、にようばうにも
 のがたりしければ、其（二十ウ）松と竹とハいかほど大きに
 ありけりととふに、かくぞよみける、

いさかひをあつかひにせし松と竹

二かひなりと君もしれかし（二十一オ）（二十一ウ挿画）

人 魚

もろこしのいにしへ、虬生とかやいへる人ハ、邯鄲といふ
 所にて、呂洞賓といふ仙人にあひて、一炊のあひだに、五
 十年の栄花をきハめし事、まことにうら山しきためしかな
 と、おもひねにせしが、日ごろしたしくかたらひける友だ
 ちの恋しかりければ、それがもとへいきける道にして、魚
 うりに（二十二オ）行逢たり。ミればあやしき魚あり。何ぞ
 と尋たれば、鮫鯨といふものなりといふ。四のあしありて、
 かしらハまろく、尾のかたちハ、さながら魚にして、うろ
 この色しろく、それともおぼえぬを、代物いとやすく侍り